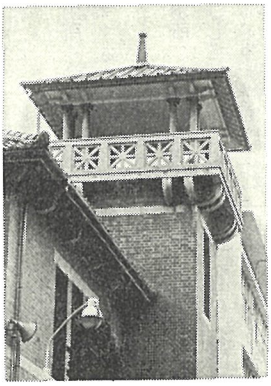


別所秀子 女子大学名誉教授に聞く

キリスト教と新島襄

―同志社女学校で学んだもの―

聞きて　河野仁昭

入学の動機

――同志社女学校へは、何年のご入学ですか。

別所　同志社教会の安部清造牧師から洗礼を受けましたのが、二年生の大正五年六月十一日でございましたから、大正四年の入学だと思います。

――洗礼の日から逆算されるのですか。

別所　はい、その日を銘記いたしておりますので。

――どうして同志社へ？

別所　そのころは府立第一高等女学校が名門でございまして、私の母などもそこを出ておりましたし、府一へ入るのが一般の希望でございました。ところが府一は満十二歳以上でなければ入学資格がなくて、私は十一歳五カ月で年が足りなかったのです。

と申しますのは、私、五歳と六歳に相ついで両親を亡くしまして、今は舞鶴市に編入されていますが、丹後の田舎にいました伯母(父の姉)の家に引き取られて、そこで育てられたのです。その田舎の校長先生は私の父に世話になったとかで大変よくして下さいまして、京都から来たんだからと一学年上のクラスへ入れて下さいましたので、年足らずで卒業することになったわけです。

――それで私立の同志社ということに……

別所　親戚の者たちは、高等小学校へ一年行ってから府一へ行けばよいと勧めてくれたのですが、父のすぐ下の弟二人が同志社を卒業しまして、アメリカへ留学し、一人が胸をわるくして、その看護をした弟ともども早く死にました。父には五人の弟があり、私の身近かに居た一番下の叔父が、「両親がなくて可哀想だから宗教教育をしてくれる学校がいい！」と、言ってくれましてね。私も子供心にそれが希望でしたので。

――お生まれは京都ですね。

別所　はい、柳馬場二条で、御所を隔てて同志社の反対側でした。

――女学校には、そのころ生徒は何人ぐらいいたんですか。

別所　はっきりとは覚えておりませんが、一学年三十人か四十人くらいでした。

――一クラスしかなかったんですね。

別所　そうだったと思います。ですからとても温かいつながりができました。

寮生活について

別所　幸い私、一年生から寮へ入れていただきましたので、その点とてもよろしゅうございました。

――平安寮ですね。

別所　はい、今の黎明館の所でした。

――寮は宗教的な生活なんでしょうね。

別所　平安寮の東側の二階に礼拝も出来る広間がございまして、そこでときどき説教をきかせていただきましたり、毎朝、お掃除も終って学校へ行く準備ができましてから十五分間、「お静か」という時間がございまして、静かに坐りまして、瞑想なり、聖書を読むなり、お祈りをするなり、一人一人が自分だけの時間をもちまして、それから八時から始まる学校の礼拝に出ました。

――寮での生活は舎監が指導なさるんですか。

別所　舎監の先生のみではなくて、各部屋のママさん。

――ママさんというのは？

別所　上級生の室長さんを、私たちそうお呼びしていたのです。五年生でした（篠井律子姉、茅ケ崎に居られ一昨年亡くなりました）。私が寮に入りましたときは、そのママさんと、三年生のお姉さん勝見登代姉と、一年生の同級生一人で、私とともに四人一室でございました。

――ママさんと、お姉さんですか。ファミリーをつくるんですねえ。

別所　ママさんのママさんが女子専門部の常盤寮にいらっしゃいましてね、その方（沖田うめよ姉、現在の姓は川端。大塚節治元総長の実妹で、いま仙台におられます）のことを、私たちは「おばあちゃん」といっていました。

――ちょっと可哀想ですねえ。（笑）

別所　ママさんが立派な方でしたから、その影響がとても強かったように思います。ママさんは私が女子大に勤めて居ります時、一度研究室に来て下さって、近くにお住みの衣笠よし先生をお訪ねしたり、とてもうれしく思いました。

女学校の宗教教育

――寮以外のところでの宗教教育はどうだったんでしょうか。

別所　やはり、すばらしく行き届いていたように思います。たとえば賀川豊彦先生など、いろんな立派な先生が招かれまして、神様のお話をして下さいましたけれども、そのお話は必ず新島先生と結びつけてのものでございました。だから、神様が新島先生なのか、新島先生が神様なのかと思いますほどでした。

寮での生活も含めまして、女学校での五年間に、私自身の行いは別としまして、心の中にキリスト教を、言いかえますと新島精神を注ぎ込まれたような感じがいたしました。神様がこんなに私たちを守って下さるんだという気持に酔っていたように思います。私の生きる場所は同志社だけという感じでしたので、卒業したらお姉さま方と同じように女専へ進学させていただけるものと決め込んでおりましたが、許されませんでした。

――新島先生について学ばれたことを、もう少し詳しくお話いただけませんか。

別所　新島先生は私にとりまして空気のようなものでございました。強いて申しますなら、キリスト教の真髄を身につけて、強い信仰を私たちにもたせ、責任感の強い愛の実践者であってほしいというのが先生の念願であっただろうと思われます。私たちは、「わが

生けるは、主にこそよれ、死ぬるもわが益また幸なり」という讃美歌三三七番が新島精神だと教えられまして、よく歌わせていただきました。

――ミリヤム・クワイヤーに参加なさったのは女学校時代ですか。

別所　私が三年生のときですから、大正六年です。最初は三年生は三人だけで、大部分は上級生、専門部のお姉様がたでした。

――どこで練習されたんですか。

別所　平安寮の東側、階下の広間やその直ぐ横の常盤寮との間にあった新島館（旧第二寮）の階下にもピアノが置いてあり、そこで毎夕、練習しました。大正七年にクラップ先生が来学された後は、専ら先生のご指導を受け、デントン・ハウス階下の広間でも度々練習がありました。

別所秀子名誉教授

結婚、そして進学

――さきほど、女専へ進学できなかったようなお話がございましたが。

別所　結婚させられたんです。

――はあ？

別所　両親が死んで、私を引き取って下さった伯母は心身ともに豊かな人でしたが、子供がなかったせいもあってか、私をとても可愛がって下さっていた伯母の主人が、私が引き取られて間もなく亡くなりましてね、伯母は実の弟を養子に迎えたのですが、その嫁をもらってから家の中がややこしゅうなりましたので、自分が生きている間に秀子をだれか責任の負える方に渡しておきたいと考えたらしいのです。

――お見合いをさせられたわけですね。

別所　はい、神戸で。恥ずかしい話ですけれども、そういうときどうすればいいかわからないものですから、女学校の先輩で結婚しているお姉さんに相談しましたら、「あんたがいいと思ったらいいの」というだけなんです。困ったときには、私はお祈りするしか何もできないんです。

別所は同志社に関係の深い三宅驥一さんや徳富猪一郎さんの親戚でございまして、その三宅さんの妹（赤松たき）さんが、同志社女学校を卒業して、お茶の水に学ばれたのですが、ご主人が神戸で三宅家の会社に協力して居られ、たき姉（お姉さんと言って居りました）が「あんたには同志社の卒業生を世話してあげるから」と、別所に言うておられたらしいのです。ところが、その方が同志社女学校から私の人物調書を受け取って見られますと「数学だけはお好きのようで、よく出来る時もありましたが、一般の成績はあまり良くありません。おっとりしていますが、気のきく人ではありません。体だけは丈夫で……」更にひどいことばかり連ねてあり、たきお姉様は、あまりにも悪い面ばっかり書いてあるので、別所にはよう見せなかったらしいのです。（笑）

――見せちゃまずい。（笑）

別所　私もあとで見ましたけれども、ぼろんちょんなんです。別所はどうしても見せてくれといってそれを読んだそうですが、「これだけいいことを書かない先生は、正直でいい」（笑）、「これだけ欠点だらけの人なら一

絹笠よし先生

度会ってみたい」(笑)、そう申したそうです。

――「これが欠点だらけの女性か」と、お見合いのとき観察されたんですよ、きっと。(笑)ご結婚なさっていかがでしたか。

別所　私が育ちました田舎では、嫁というのは女中さんを上手に使えばいいんです。デントン先生に西洋料理の作り方など習いましたけれども、家庭のことなんて何も知らずに嫁に行きましたので、お手伝いさんを雇ってくれました。ところがあるとき、別所が会社の下役の方を十人ほどお招きしましたとき、そのお手伝いさんの親戚に病人があって、その日に限って居て下さらなかったものですから、私が精魂こめて一生懸命お料理を作ったりしてサービスしたのです。私は自分は何も出来ない、わかっていないなどとは思っていませんでしたので、私のしたことでよかったのだとばっかり思っていました。

それから一年ばかりたってからでしょうか、赤松のお姉さんのうちへ遊びに行っていろいろお話をしたときに、どうやら私のしたことは失敗だった、まずいことをしたんだと気づかされましてね。帰って別所に申しましたら、「お客さんに対して十分でなかったから、あのとき二次会へ行った」というのです。私、びっくりしましてね、お客さんのお接待くらいはできる嫁になりたいから、お手伝いさんには田舎へ帰ってもらって下さい、そして私を昼間お料理習いに行かせて下さいと、そのときはじめて頼みました。

――花嫁さんの花嫁修行ですね。

別所　ところがその頃は、料理学校なんてどこにもなかったのです。神戸女学院にも料理を教えてくれるような講座はないんです。それで全国のそういう学校の規則書を取り寄せてみたのですが、困ったことに、その頃は夫がある者の入学はどの学校でも認めない、同志社もそうでした。上野の音楽学校だけが例外で、別所は私が音楽好きなことを知っているものですから、「料理なんかせんでもいいから、音楽学校へ行くか」(笑)、そんな冗談をいったりしました。

――結局、同志社女専へ入学なさったんでしょう。

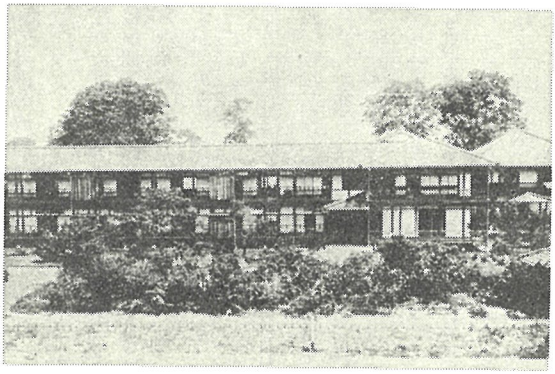
別所　私、思いあまって、女学校のときの担任で、私のことをぼろんちょんに書いて下さった絹笠先生に相談に行ったのです。女専には家政科がありましたから、お料理だけでも習いたいのだけど駄目でしょうかと……。絹笠先生は、「じゃァ、校長の松田道子先生に相談してごらん、あの先生は在学中の人の結婚を許可なさって、その人は今も在学しているんだから」と、こともなげにいわれるのです。

松田先生は私の母や叔母と府一でいっしょでしたし、峰山のご出身ですから、私の親戚の家とも多少関係があったりして、よく存じていました。そこで先生には結婚の報告もしていませんでしたので、そのことを申しまして、家政科へ入りたいとお願いしたのです。すると、「来たらいいじゃないか。でも今年からは同女の卒業生も入学試験があるよ」とおっしゃいましてね、入学願書を出すことを許可して下さいました。それが八月ころのこ

とで、試験は二月でしょう。試験科目の中に私の嫌いな英語があるんです。「落ちたら駄目や、どうしよう」と申しましたら、「本当に勉強する気があるのなら教えてやる」と別所がいいまして、会社から帰って毎晩教えてくれました。

――エライご主人ですなァ。

別所　おかげで、わりにいい成績で入学できました。



平安寮

夫・治之のこと

――先生は長年女子大教授をつとめられましたし、家庭裁判所の調停委員などもされて社会的にも貢献なさったのですが、ひとつにはご主人に理解があった、そういう気がするのですが、どういう方だったんですか。

別所　とりたてて申し上げられるような人ではございませんが、ただ一つの取柄は、自分を無視して人のために尽くすことでした。別所は新島先生のことを学んだ人ではないのですけれども、私が理解している新島精神を実行している感じなんです。

別所の実家は（厚かましい表現ですが）但馬での旧家で富豪だったそうですが、両親が早く逝去した後、若くて後継ぎをした兄が、一部の村人らにそそのかされて、道楽をつづけて居り、親切な村人から「破産寸前になっている」ときかされた別所は、城の崎が本拠である三宅家にその旨を知らせて善処と援助を求め、同時に自分は学校を中退して、神戸にある三宅家経営の会社に勤めさせて頂きながら、兄一家の安定に努め、そして弟や妹たちを大学に行かせたのです。自分は夜学へ通ったり独学したりいたしまして。

――やはりクリスチャンですか。

別所　そうではなかったのです。仏教に熱意をもっていまして、なにかあるとお経を読んでいました。宗教は違っても登る頂はおなじなんだなァと、私、思いました。別所がそういうことでしたから、家ではキリスト教の話はしませんでしたし、私、教会へも行かなかったのです。

ときどき別所から叱られることがございましたが、これはちょっとおかしいなと思うときでも、「すみません」といっていたのです。同志社でそのように教育されたと思うのです。でも、どうしても耐えられないときは、隣の部屋へ行って讃美歌をうたいました。それがものすごく痛かったと、あとになって別所が私に申しました。言い過ぎたと思ったんですねえ。

よろしいんでしょうか。こんなお話をして。

――はい、とても興味ぶかいお話です。

別所　昭和十二年の春、五月のことでしたが、彼は機械いじりが好きで、部品を買って

きて外国の放送も聞けるようなラジオを組み立てましてね。それを近所の子供が遊びにきていたずらしますので、別所が留守のときは私が押入へ隠しておいたのです。そのころスパイのことがすごくやかましかったのですが、外国の電波が傍受できるラジオをつくっているといって、警察が家へ参りまして、押入へ隠していたので余計に怪しまれましてね。中国貿易の会社ですから、現地との交信に略号を使うこともあって、それと関連づけて余計に疑われたのです。それでスパイ容疑で大きく朝日新聞の夕刊に出たのです、家の写真まで載りまして……。別所は警察で取調べを受けましたが、その容疑は晴れたんですけど、私が学校（神戸女学院――そのころ女学院の教員であった）へいつものように行こうとしますと、「あんなに新聞に出たのに、おまえよう学校へ行くなァ」と別所がいうのです。「どうして?」と私、彼にいったのです「あなたが何も悪いことをしていないことは、神様がちゃんとご存知なのに、誰に遠慮しなきゃならないんですか、いまに皆さんにもわかることです」と言いまして、女学院へ行ったのです。そのとき別所は、キリスト教の神を信じている者は強いんだなァと思ったらしいのです。

疾しいことはしていなくても、会社の方々にご迷惑おかけして申しわけないといって、眠れない夜が続いておりました。そんなある夜、「もうお休みなさいよ」といって私が部屋を出ようとしましたら、「秀子、僕のためにお祈りしてくれ」というのです。それまでなにも申しませんでしたが、キリスト教がどういうものかわかりかけていたんだろうと思います。私は、同志社で宗教教育を受けさしていただいてありがたいなと思いました。別所がそういうものですから、詩篇の二十三篇を開いて朗読しまして、それからちょっとお祈りしている間に、別所はいびきをかいて眠りはじめました。一週間ぶりの就眠です。

あくる日、「ああ、夕べはよく眠れた。キリスト教の神様っていいなァ」と言いだしましてね。私ちょっと嬉しくなって、東京にいる私の姉に電話しまして、「こういうとき、どうしたらいいの」って相談しましたら、姉婿のお兄さんが同志社ご出身で、その方が神戸教会の鈴木牧師（同級生とのこと）に連絡をとってあげるから相談に行きなさいといって下さいましてね。

――いらっしゃいましたか。

別所　はい。早速お邪魔いたしました所、（神様は何という不思議な御導きの御主でしう？　鈴木牧師の御令嬢をその時、神戸女学院で私が担任中で、牧師の方では私をご存知で）、すぐに、「ご主人にキリスト教のお話でも聞いてもらいましょう」と言われるので、別所に伝えましたら「行く」と申しまして。それから数日後の日曜日五月二十三日に洗礼を受けまして、以後教会の役員までさせてもらいました。鈴木牧師が立派な方だったと思うのです。本気でキリスト教のなかへ入りこむようにご配慮下さって役員にさせて下さったのです。「役員になったら人さまの前でお祈りもしなきゃいけませんから……」と私申し上げたのですが、鈴木牧師は「奥さん、あなたが努力なさることです」といわれまして、それ以来、死期の近づいた昭和四十年の夏まで二十八年間余り、役員として奉仕をさせて頂いたのです。（翌年二月二十五日永眠）

神戸女学院へ奉職

――いいお話じゃありませんか。普通の男

大正9年3月平安寮前で寮生一同、前列左から3人目が別所名誉教授

で、同志社の女専まで神戸から通学なさったんですか。

別所　須摩からですので朝五時十二分の汽車に乗りまして。夕方は五時すぎには帰えれましたから、それから市場への買物に行ったりいたしました。むちゃくちゃなものをつくって食べてもらいましたけれども。(笑)

――先ほど、神戸女学院の先生をなさっていたというお話がございましたが。

別所　同志社女専へ三年間通いまして、やっと卒業させていただきましたので、その整理を半年ばかりかけていたしましてね。その間に家を山本通に移りまして、その片付けもございましたが、ようやく整理ができましたころに、神戸女学院から手伝ってもらえないかというお話がございました。私は固くお断わり申し上げたのです、「その任ではございません、教えるなんてとんでもない」と。

――よい奥さんになるために女専へ行かれたんですから。(笑)

別所　そうなんでございます。けれども女学院では、同志社女学校を卒業して今の目白女子大学に学ばれて先生をしておられた女学校での先輩の方が産休で休まれるので、その産休の期間でいいからとおっしゃいましてね、「人が困っているときには助けて下さるのが本当ではありませんか」といわれるし、女学院は私の家のすぐ下ですから、ベルが鳴ってから飛び出しても間にあうくらいでございましたので、産休の間だけのことならということでお引き受けしたのです。

――それが教員生活の始まりですね。

別所　臨時のお手伝いということで九月から寄せていただきましたら、院長のデフォレスト先生が、「同志社とつながりのある教師が欲しかった」といって、とても可愛がって下さいまして。私のように同志社しか知らない者と目白の女子大を出られた方とは、デフォレスト先生などがごらんになられるとちょっと違うらしいのです。

可愛がってはいただきましたけれども、期

ではご主人のようにはできませんね。

別所　そうでしょうか。

――はい、むずかしいと思います。ところ

限がくれば当然辞めるものと思っておりましたら、今度は女学校の校長先生や教頭先生が何度も家へ来て下さいまして、とうとう、専任ではなくて非常勤ならということで、それからずるずるとお世話になってしまいました。

――結局、何年間？

別所　十五年間……。

――当初は思いもかけなかったことで。

別所　全くそうなんでございます。それで、今の岡田山へ移りますとき、遠くなりますからと退職を希望したのですが、「京都の同志社まで通ったんでしょ」って、逆さまにやられまして。（笑）

――たかが西宮じゃないですかと。（笑）

別所　距離のこともございましたけれども、私、女学院へ参りましてから、奈良とかお茶の水女高師を出られた方に接しておりますうちに、もっと本気で勉強しなきゃいかんと思いだしたのです。それで学校へ行かなくてもよい日は、昼間、大阪の生活科学研究所へ通いまして、勉強させていただいていたのです。岡田山へ移ったらそこへも行けなくなると思いまして、折角勉強を始めましたので、そちらへ行かせて下さるようにと、デフォレスト先生にお願いしたのです。それをお断わりする理由にしようと思いまして。そうしましたら、「そんなにまでして勉強する先生は得がたいから、女学院から行っていただきましょう」と言って下さいましてね。女学院は土曜日が休みですから、週のうち一日と合せて二日、授業の都合をつけてお休みをいただきまして。

――学校から派遣する形ですか。

別所　そうみたいな状態でした、規定は何もないのですけれども。ああいう宜教師の先生はお偉いですねえ、無理にこうしろ、ああしろとはおっしゃらないで、「先生、辛抱してちょうだいね、できるだけ先生のご希望がかなえられるようにさせていただきますから」と、そう言って行かせて下さったのです。

――お断わりするわけにいきませんねえ。

別所　はい、ご立派なお方でした。

母校の教授に

――その女学院から同志社女専へ移られたのは、なにか理由があってですか。

別所　理由といってなにもございませんでしたが、昭和十七年の七月ころ、女学校のとき担任をしていただきました絹笠先生（そのころ女専家政科教授）が、神戸の家へ来て下さいまして……。

――絹笠先生がついてまわりますねえ。（笑）

別所　片桐（哲）校長先生の言付けで、頼みに来たとおっしゃるのです。三回もわざわざ来て下さって、しまいには別所の会社へ行かれて説得なさったのです。別所は根負けしまして、「あんな立派な先生がおられる所へ、一年でも半年でも行かせてもらったら幸せだよ」と言うのです。私の人物調書を書かれた先生だということを知っていましたから。

――でも、それこそ通勤時間もかかるし。

別所　ですから、一週間に一日くらいならということでお引き受けしたのです。

私、全然知らなかったのですが、女学院の二宮校長（同志社大学神学部出身）と片桐先生との間ではお話ができていたそうなんです。二宮先生はあとで、「先輩の片桐先生にはよう断わらなかったけど、遠いからといって、あんたが断わってくれるだろうと思って……」とおっしゃるんです。そんな内うらの

ことがあったんだそうです。

——非常勤なんでしょう。

別所　もちろんそのつもりでございました。ところがそのつもりでいましたら、十八年四月に入学式の案内を片桐先生からいただきまして、同志社ってなんと丁寧なんだろう、非常勤の者にまでこんなにしていただいてと思って出席させていただいたんです。そしたら私に壇上へ上りなさいといわれる。おかしいなと思っていましたら、入学式のあとで、新任の先生だといって私、紹介されまして、どうしていいんだかわからないのです。だって、女学院にはそんな話をしていませんでしょう。

——退職なさっていたんじゃないんですね。

M.F. デントン先生

別所　そうなんです、時間割もちゃんと決っておりましたし、二宮先生も、あの時期、是非おってほしいといっておられましたものですから。

——両校は姉妹校のようなものとはいえ、のんびりしたものですなァ。

別所　新学年が始まりまして間もなく、教授会の通知が参りまして、出席するようにと。

——戦争末期で、時代も時代でしたから。それに、母校の恩師に説得されちゃしようがないですねえ。あのような時代に、神戸から通われるのは大変だったろうと思いますが。

デントン先生のこと

——それから長年にわたって母校で研究され、後輩を教育され、社会的には家庭裁判所の調停委員をされるなど、お話をうかがいたいことがたくさんあるのですが、先生はデントン先生からずいぶん感化をうけられたとうかがっているのですが。

別所　デントン先生からはほんとにもう、ことばに表わすことができないほどでございます。

——女学校時代から教わったようですが。

別所　英語とか西洋料理とか。教室でだけではなくて、デントン・ハウスは平安寮に近かったものですから、教室へ行かれるときにも傍を通られるでしょう。私たちがいる二階へむかって、通りがかりに「ガールス！　ガールス！」と声をかけられましてね。女専の学生たちよりも、平安寮にいる生徒たちと親しくなろう、接するようにしようと思っておられたように思います。

——寮のガールスのために、なにかなさるんですか。

別所　金曜日の夕方に、同志社教会（現在の中学校チャペル）で祈禱会がございますし、日曜日の午前には礼拝がありましたが、その行き帰りに必らず、つき添って下さるのです。また、午後になりますと、デントン先生のお宅で聖書の研究会、つづいて英語の讃美歌の合唱などなどで、先生とのつながりは、とても深うございました。

——教育熱心な方だったんですねえ。

別所　熱心と申しましょうか、愛情ゆたかな先生でした。私たちが、音楽会や講演会で夜出かけるときなど、先生が校門前の電車の

レールの上に立って（停留場でないのに）、電車を止められるんです。そして生徒たちを乗せてからご自分が乗られる。車内に腰を掛けた男の学生などが居ますと、立たせまして、「ガールス、座りなさい」（笑）。先生ご自身は立っていらっしゃるんですよ。私たち、とても気がひけましてねえ。（笑）

――怖い先生だとうかがっていますが。

別所　確かに怖い面もございました。でも「ソレ、新島魂アリマセン！」とか、「新島先生涙シテマス！」とか、お叱りになるようなことをしなければすこしも怖い先生ではありません。

女子部全員は先づ、朝の礼拝から学業がはじまるわけですが、通学生につきましては、今出川御門前の停留所まで、朝の礼拝に遅れさせないようにと、先生は痛むおみ足をひきずりながら迎えに行かれたのです。

――毎朝ですか。

別所　はい、毎朝でした。そして礼拝に遅刻した生徒の荷物を取り上げられて「早く礼拝に行きなさい」と言われる。荷物を取っておくと遅刻した者がわかると思っていらしゃるのですが、三人ぐらいの分しか持てないでしょう。電車には別の昇降口もございますから、いくらでも先生の眼から逃れることが出来るんですけれど。これは私の女専時代にも変りありませんでした。あれだけ、よくも奉仕なされたと思います。

朝の礼拝で、デントン先生に叱られた思い出があるのです。女子部全体の朝の礼拝に、ミリアム・クワイヤーの席が、壇上に並んで居られる先生方の前横列に設けられました。チビの私は、いかめしい先生方の前に上級生の方々に混ざってその席に居ることが重荷でたえられず、ひそかに私たちのクラスの席の方へ逃げてしまったのです。それを、デントン先生が気づかれまして、あとで、呼び出されて、うんっと叱られました。「困難なことがあっても、それを乗り越えて奉仕する、それが新島魂だ」と。奉仕することが身のほど知らずという場合もございますし、私、逃げても別に大したことではないと思ってしたのですけれども……。叱られたのはそのとき一度だけでございましたが、あのお叱りは今でも身にしみております。

――一人の教師の教えが、生涯記憶されるというのは、大したことですね。女専でもデントン先生に学ばれたんですか。

別所　はい、英語と聖書、そして西洋料理を教わりました。

――デントン先生は、アメリカで食物の教育を受けてこられたんでしょうか。

別所　特別の教育は受けておられなかったのではないかと思います。私たちはトキワの「クックブック」をテキストにして教わりましたが、ある年の冬、マヨネーズソースをつくっていまして、攪拌していた生徒には「アナタ百二十点アゲマス」とほめられたのですが、油が凍って出なくなりました。気をきかせた一人が油瓶をあたためて溶かしたのを滴下しましたら、卵黄が凝固してしまいました。次の人も、その次の人もやはり凝固するのです。「アナタ、ゼロ。オイナサン呼ビマス、クダサイ！」とデントン先生は大声で、悲しそうに叫ばれました。

――誰ですか、オイナさんというのは。

別所　デントン・ハウスの料理人で、有名な外国人が来られてもオイナさんの料理を差し上げていられたようでしたから、料理には自信があったようです。そのオイナさんが二十分ほどして教室へ来られ、材料を点検して

「油が熱かったんや」と言われて、それから乳化に成功するといった騒動がございました。そんなふうで、メンツなど二の次で実際家の援助を求められる、全然気どられない先生でした。この事件のもう一つの教訓は、「なにゆえに」という問いかけを起こさせていただけたことでした。

――そうすると、教育は知識や技術だけじゃないわけですね。

別所　そう思います。全人格的感化と、勉強をしようという気持を起こさせる、それができましたら最高でございますね。それと、デントン先生からは、出しゃばるなということをそれとなく教えられました。あんなに同志社のためにたくさんのことをなさったけれども、先生ご自身は決して出しゃばっておられないでしょう。

――そうですか。いつも表面のところにおられる感じですが。

別所　必要なときは、ととんまで、ちゃんとなさいます。けれども、それ以外のところではとても謙虚で、周囲の人を立てていらっしゃいました。

ヒバード先生のことなど

――わたしはデントン先生をかなり誤解していたように思います。ところで、新制大学の初代学長に、外国人のヒバード先生が就任なさったのはなぜですか。

別所　くわしいことは存じませんが、占領軍との関係などで、そのほうがよいと片桐先生が判断なさって、お願いされたようにうかがっております。事実、それでうまくいったようでございますから。ヒバード先生も、宣教師としての立場があるからと、随分ご辞退なさいましたけれども、一年間だけということでお引き受けになられたのです。

――先生は親しくしておられたんでしょう。

別所　私より二、三カ月お姉さんですが、同志社創立百周年のとき一度こられて、その次に来られたときだったと思いますけど、食事などご一緒させていただきましてね。そのとき、「あんたに言うてきかさんならんことがある」と彼女はいわれるんです。「なんですか」と申しましたら、「あんたのお姉さんとして言っておくけど、これくらい年をとったらみすぼらしい格好していちゃ駄目よ、それは礼儀ですからね」とおっしゃるのです。その日も、同志社にプレゼントしていただいたといって、赤いサンゴのイヤリングとネックレスをつけていられるんです。赤い模様のお洋服を着ておられましてネ、とてもよくお似合いで、スバラシイお姿でした。

――別所先生もお若いですよ。

別所　私先年、七十七歳だからといって、ゼミの卒業生らがお祝いをして下さるまで、年のことを考えたことがございませんでした。それから、やはり年齢ということも考えなければいけないと思うようになりましてね。しかしどうしても断わりきれなくて、八十歳になった只今も園田女子学園へ非常勤で毎週一日だけ行っていますけど、若い方のお仕事をうばうようなことがあってはいけないと、最近やっとそう思えるようになったのです、それまでは奉仕だとばかり思ってきましたのに。

――でも、先生やっぱりお若いですよ、お世辞じゃなくて。今日は同志社までお越し下さって、興味ふかいお話をありがとうございました。

（一九八四年八月三日、有終館担当理事室で収録）